

## 春暮れてのち夏になり、夏果てて秋の来るにはあらず

千葉の県人 鎌田 留吉

徒然草第 155 段の後半部分に、この知恵は記されている。「春はやがて夏の気を催し、夏よりすでに秋は通ひ、秋はすなはち寒くなり、神無月は小春の天気、草も青くなり、梅もつぼみぬ。」と続く。証券業に携わって 40 年近くを過ごした私は、この言葉も株式相場の「移ろい」を語っているように捉えてしまう。強気相場が「兆し」、「成長し」、「その盛りを誇り」そして「死んでいく」。それはあたかも四季のようであり、人の一生のようでもある。

「木の葉の落つるも、まづ落ちて芽ぐむにはあらず。下よりきざし つはるに堪へずして落つるなり。」

相場は何故天井をつけるのか？それは「十分に生きた！」からでもあり、また新しく生きるためでもある。相場は下げる為に、位置エネルギーを蓄えてきたのではなかったか？

順風満帆な環境下で私がそろそろ崩落があるのではないかと問題提起すると、人はよく「TRIGGERは何ですか」と尋ねる。私は答える「恐らくは今知られていないことだろう」と。相場が天井を打つのは、TRIGGERによってではない。相場はそろそろ下げようと十分に心を整えていたのだ。生きていて欲しいと願うのは、周りの人の欲だ。相場は自らの寿命を生きる。周りの人々は、その死を納得させるために TRIGGER という慰めを求める。複雑化した現代社会にはそれらしき出来事は常に取り巻いている。その時に「身近」に起こったそれらしき事象を捉えて TRIGGER に「する」のだ。

熟れ柿が自らの重さに耐えずして、かそけきそよ風に落ちていくとき、それをしもひとは TRIGGER と呼ぶのだ。

「死期(しご)はついでを待たず。死は前よりしも来たらず。かねてうしろに迫れり。」世界の耳目を聳動させる「ブラック・スワン」はそれが広く知られているときは「ブラック・スワン」ではない。或る大相場が終わるときそれは決して人々が心整えている事柄ではなく、正に「うしろ」からくる事柄によりその「寿命」を終える。そしてそれは「まだはもう」であり「もうはまだ」なのだ。

昨年半ばに日本中のメディアが取り上げた、SHADOW BANKING 問題を核とする中国の「不良債権問題」は、いつの間にか問題視されなくなり、忘れ去った人もいるだろう。それは、ここしばらくは、共産党一党独裁支配の全体主義国家が「国内のこと」として全て「握り潰し切る」と感じられはじめたからであろう。

しかし、1月17日の「ブルームバーグ」が次のように伝えた。「欧州最大の銀行である英HSBCホールディングは資産の過大評価が923億ドル相当に達し1110億ドルもの資本増強を迫られる可能性がある。」香港(H)と上海(S)に大きな営業基盤をもつHSBCの中国「国外からの」資産査定により、HSBCホールディングの「不良資産性」が暴かれ、中国の内実の崩壊が始まろうとしているのか？

2014.1.21 記